

ユクスキュルの環世界の理論による正統的周辺参加論の解釈

佐 長 健 司

An Interpretation of the Legitimate Peripheral Participation
by Jakob von Uexkuell's Theory "Umwelt"

SANAGA Takeshi

要 旨

レイヴとウエンガーの正統的周辺参加論が論じる学習者と世界と学習活動との相互構成について、生態学的に明らかにする。ユクスキュルが述べるように、生得的な能力によって動物は環境と一体化して環世界を構成し、そこにおいて自己をつくり、活動できる。しかし、一部の動物と人間は生得的な環世界の構成を超えて、それを拡張することができる。それは自然ではなく、文化的実践として可能であり、文化的実践の共同体への参加が欠かせない。環世界の拡張に学習者のアイデンティティ形成と学習活動をみることができるので、実践共同体への参加が学習となる。

1 研究の目的

目的は、ジーン・レイヴ (Jean Lave) とエティエンヌ・ウエンガー (Etienne Wenger) が論じる状況学習論 (situated learning)、正統的周辺参加 (Legitimate Peripheral Participation) の理論について、ユクスキュル (Jakob von Uexküll) の環世界 (Umwelt) の理論を足場として解釈することである。1934年に出版されたユクスキュルの著書¹⁾は、レイヴとウエンガーのそれと原理的に一致するとも思える理論を展開している。レイヴとウエンガーの著書²⁾が1991年刊行なので、約60年はユクスキュルが先行している。

ユクスキュルによれば、おかれた環境のなかで、動物が環境との相互作用としての活動を行い、生命を維持しているのである。そこでは、環境が動物をつくり、動物が環境をつくる。このような意

味で、動物は環境とは一体的なシステムとなっている。

このようなユクスキュルが論じる生態学的な見方を、状況学習論である正統的周辺参加の理論も共有している。学習も例外ではなく、環境との相互作用として可能なのである。環境としての世界が学習者をつくり、学習者が世界をつくり、学習活動が世界と学習者をつくるというような関係にある。環境、世界については、社会文化的な面を強調するなら、それは状況と呼び変えてもいいだろう。さらに、人と人の関係を重視するなら、状況は目的を共有して社会文化的な活動を行う人々の共同体であるとも言えよう。共同体における活動として、共同体に参加し、その一員となるように学習は行われる。そのため、学習は共同体への参加となる。また、その参加は正統性が認められ

た新参者としての周辺参加からはじめ、しだいに共同体全体に及び、重要な役割を担う十全参加へと進むようになる。そのため、学習は正統的周辺参加と呼ばれるのである。

このように論じるレイヴとウェンガーの著書はよく知られているが、その理論は十分に理解されない。また、誤読も多いのではないか。確かに、レイヴらはアフリカのヴァイ族とゴラ族の仕立屋の場合のような徒弟制 (apprenticeship) について分析するものの、学校教育については本格的に論じていない。しかし、それでも正統的周辺参加の理論は、現代の学校における学習をも例外としない、学習の一般理論なのである。しかも、学習を共同体への参加とし、学習者個人が知識や技能を習得するなどとは論じない、「非常識」な理論なのである。

正統的周辺参加論が理解されないのは、学習を知識や技能の習得とみる常識的な学習論と鋭く対立するからである。しかし、普遍性を要求する理論と広く受容されている常識との対立は、容易に解消できない。目指すべきは、理解が困難な理論の理解を容易にすることである。そうすれば、常識とは異なるオルタナティブな見方を提供できる。すると、学校カリキュラムの開発と実践、及びその研究に対して新たな可能性を開くように貢献できるであろう。

以下では、第1に、正統的周辺参加の理論的な吸収と系譜の関係について述べ、その理解のための準備をする。第2に、行為者と活動、及び世界とが相互構成のシステムとなっていることについて、ユクスキュルの環世界の理論に依拠して論じる。第3は、学習によるアイデンティティ形成、すなわち何者かになることについて、新たな環世界の構成の視点から考察したい。第4は、社会文化的な実践への参加が可能にするのが、生得的な環世界を超えるその構成であることを論じる。

このように議論を展開することによって、学習者と世界、及び学習活動の三つが同時に、相互に構成される関係にあることを認めることになる。また、そのような学習としての相互構成の活動は、

環世界を構成する社会文化的な実践として共同体への参加となることをも確認したい。

2 理論的な吸収と系譜

(1) エンゲストロームからの吸収

常識的には、学習は内化 (internalization) である。すなわち、知識や技能を学習者個人が習得するとみる。また、習得されたそれらは個人の内面に形成され、位置付くとする。さらに、それらを個人が所有するかのよう、学習者自身とともにポータブルに持ち運ぶことが可能だとする。

内化とは決定的に異なるのが、正統的周辺参加の理論である。それは、内化のような常識的な学習観を転換しようとする。すなわち、レイヴとウェンガーは状況に埋め込まれた学習 (situated learning) について、次のように述べる。学習は「世界についての事実的な知識のまとまりを『受容すること』ではなく、包括的な理解が人を丸ごと巻き込み、世界のなかで世界とともに行う活動としての、行為者と活動、及び世界が互いを構成するという見方」³⁾ をすると言う。ここでは、学習者と学習活動、及び世界との三者が相互構成されることが述べられている。学習者の内面に焦点をあてるのではなく、学習者と世界、それらの関係のなかで行われる学習活動との三つを不可分とし、一体的なシステムとしてとらえるのである。状況に埋め込まれる (situated) とは、そういうシステム的な見方を意味するのである。

内化とは異なる、このような見方を脱中心化 (decentering) と呼ぶ。学習者個人から、学習が埋め込まれた状況、学習が行われる人々の共同体へと学習に対する見方が拡大されるのである。このような脱中心化とみることが、一般的に理解されないであろう。たとえば、学習者が世界をつくるとはどういうことなのか、という強い疑問があるだろう。学習は実在する世界を客観的に認識することであり、学習が世界をつくることなどありえるのか、と疑うはずである。

さて、行為者と活動、及び世界とが相互構成の関係にあるとする理論は、決してレイヴとウェン

ガーが嚆矢ではない。当然のことながら、先行する理論からの吸収、さらには系譜とも言うべき影響の関係があることを確認しておこう。ここでは、ユクスキュルとは別に、レイヴとウエンガーにとっての二つの先行研究について確認しておきたい。そもそもレイヴは、人類学的に徒弟制の研究をしていた。その後、徒弟制における学習を一般化し、一般学習論としての正統的周辺参加へと理論を発展させた。この学習理論の一般化において、大きく貢献したのが、第1は、ユーリア・エンゲストローム (Yrjö Engeström) による最近接発達領域 (zone of proximal development) についての解釈であろう。第2は、ピエール・ブルデュー (Pierre Bourdieu) のハビトゥス (habitus) の概念であると思える。

レイヴとウエンガーは、エンゲストロームによるヴィゴツキー (Lev Semenovich Vygotsky) の最近接発達領域の概念についての再定式化を引用している。エンゲストロームによれば、「それは個人レベルの人々の日常的な行為と社会レベルの活動の歴史的に新しい形態との距離であり、後者は日常的な行為に潜在的に埋め込まれているダブル・バインドの解決として集合的に生成される」⁴⁾ と言う。このような解釈は、学習を論じるにあたって、個人ではなく、社会や集団の変容に注目させる。そのため、レイヴとウエンガーは「関心を共有でき、教育的な構造のコンテクストを超えて学習の研究を拡大させ、学習の分析に社会的世界の構造を含めるとともに、社会的実践のコンフリクトの性質を中心に考慮する」⁵⁾ ものとして、受け容れるのである。

ヴィゴツキーによれば、「子どもの発達の最近接領域は、自主的に解決される問題によって規定される子どもの現在の発達水準と、おとなに指導されたり自分よりも知的な仲間と協同したりして子どもが解く問題によって規定される可能的発達水準とのあいだのへだたりのこと」⁶⁾ である。すなわち、それは自然現象ではなく、教育が可能にする社会文化的な発達の領域なのである。発達に応じてではなく、それに先だって、それを牽引す

るのが教育なのである。そのような教育によって、学習者は最近接発達領域を通過して、現在の水準を超えていくように、発達するのである。

エンゲストロームは、グレゴリー・バイトソン (Gregory Bateson) のダブル・バインド (double bind、陥る者を苦しめる二重拘束の状態)⁷⁾ の概念を使って、集団の発達として最近接発達領域の通過をとらえるのである。一般的な最近接発達領域の解釈によれば、自己よりもすぐれた誰かを行うことが可能になった行為は、やがて一人でもできるようになるとし、そこに発達をみようとする。それは、すぐれた誰かといっしょに行うことによって学習した知識や技能の内化だと考えるのである。一方、エンゲストロームは内化を問うことはない。すなわち、個人が試みても克服できないダブル・バインド状況があれば、集団によってそれを乗り越えることができる場合がある。そのような場合に、一人ではできなかったことと集団でできるようになることとのへだたりこそが、最近接発達領域であるとする。すなわち、集団の達成として社会文化的に新しい活動を生み出すことに発達を認める。そのため、発達を個人に還元することはないのである。

エンゲストロームは、個人から集団へと視野を拡大し、社会変革にも通じるような、個人に困難を与えるなどのダブル・バインドを超える集団の達成を学習とする。それを拡張的学習 (Expantive Learning) と呼ぶ。拡張とは、第1に個人から集団へと学習単位を拡張することがあり、第2に文化歴史的に新しい活動を行うように、学習の到達度を拡張することである。このような集団としての学習活動において、個人も社会も学習活動も一体とし、それらの相互構成をみようとしているのである。

(2) ブルデューからの吸収

レイヴとウエンガーは、エンゲストロームもそうだが、マルクス主義の理論的な伝統にも言及している。そこでは、社会参加を通しての、社会的実践と人間の知の発展についての理論化は、社会

科学におけるマルクス主義の伝統の一部であることを指摘している。また、現代の人類学、社会学等における実践に関する理論化によって、マルクス主義の伝統は、自らに直接的に影響を与えている、と考えている。たとえば、「ブルデューの『実践理論のアウトライン (Outline of a Theory of Practice)』における構造主義と現象学の理論への批判があり、指揮者のいないオーケストラのように、階級のハビトゥスによって醸し出されるルールなき規制、身体化された実践、文化的傾向性などとして、極めて重要な二元論との絶縁の可能性が示される」⁸⁾と言う。

さて、ブルデューは自らの理論を形成する状況について、次のように述べている。すなわち、「クロード・レヴィ＝ストロースの仕事の出現がフランスの知的領域のなかで産み出した社会的効果や、知的活動を理解する新しい仕方——これはジャン＝ポール・サルトルが体现していたような、決然と政治に向かう『全体的』知識人像に実に弁証法的に対立するものであった——が一代全体を呑み込んでしまった具体的媒介項を想起することは容易ではない」⁹⁾と言う。すなわち、レヴィ＝ストロースの構造主義は主体を構造へと解体し、回収する。一方、サルトルの現象学は実存としての自由な主体を確立しようとする。粗く言えば、主体を解体する社会的な構造が人々の実践を生み出すのか、それとも主体的な人々の実践が社会をつくるのか、という対立的な問題が生じるのである。

このような構造と主体の二元論を超えようとするのが、ブルデューなのである。そこでの理論的な概念は、レイヴとウェンガーが言及しているハビトゥス (habitus) である。ブルデューによれば、「ハビトゥスとは、持続性をもち移調が可能な心的諸傾向のシステムであり、構造化する構造 (structures Structurées) である。そこでは実践と表象とは、それらが向かう目標に客観的に適応させられるが、ただし目的の意識的な志向や、当の目的に達するために必要な操作を明白な形で会得していることを前提としていない。実践と表象とはまた、客観的に『調整を受け』 (régulé) 『規

則的で』 (régulier) ありうるが、いかなる点でも規則 (règle) への従属の産物ではない」¹⁰⁾のである。

ハビトゥスは、無意識的な身振りや歩き方、また映画や絵画の鑑賞、発話などをも可能にする身体化された知である。福島真人によれば、「ブルデューの言うハビトゥスとは、まさにこうした身体が構成する、認知・判断・行為の全体的なマトリックス」¹¹⁾なのである。認知と行為、及び身体はマトリックスとしてのハビトゥスにおいて一体化されているのである。

また、ハビトゥスは社会的な構造と実践、及び表象との媒介とも言えよう。学習された心的傾向としてのハビトゥスによって、人々は主体的であるかのように実践し、実践として表象を操作して語る。同時に、人々の実践によって、そのような実践を可能にし、強制する社会的な構造が強化される。実践と構造とを媒介するのが構造化されたハビトゥスである。このように、ハビトゥスを媒介として、人々と実践と社会的構造とが相互構成の関係にある。

(3) ユクスキュルの環世界論からの系譜

レイヴとウェンガーは、ユクスキュルとの直接的な引用と吸収の関係にはない。しかし、両者の間には理論的な系譜として、影響を認めることができるようである。このことについては理論的理解を深める出発点としても、確認しておきたい。

レイヴとウェンガー、及びルーシー・A・サッチマン (L. A. Suchman) の著書の訳者で、彼女らの理論を日本において紹介した佐伯胖は、前者は後者の状況行為論 (situated action) を継承するものであることが明らかであると言う。すなわち、サッチマンの著書は「認知科学の領域で、“situated” (状況に埋め込まれた) という言葉をいわば流行らせた本家本元と言ってよい本である。レイヴらの著書の題名、“situated learning” は、明らかに、レイヴらの著書がサッチマンの本書と同じ思想——つまり、人間の行為はすべからく『状況に埋め込まれた (situated) ものである』とす

る考え方を継承したものであること表明している」¹²⁾のである。

サッチマンの博士論文の審査にヒューバート・ドレイファス (Hubert, L. Dreyfus) が加わっていたことは、サッチマンの著書に記されている。また、サッチマンとドレイファスは、それぞれの著書において互いに引用している。ドレイファスは、英米圏におけるハイデガー (Martin Heidegger) の紹介者であり、ハイデガー研究の第一人者とも言われている。ドレイファスはハイデガーの世界内存在 (In-der-Welt-sein, Being-in-the-World) の理論、すなわちユクスキュルが論じる環世界のような世界に投げ込まれている人間存在について、ハイデガーに従い、明快に論じている¹³⁾。また、世界内存在としての人間の知性は身体的、及び状況的であるので、人工知能とはまったく異なると論じている。かなり早い時期から人工知能研究に対する精力的な批判を展開してきたことでも、よく知られている。出会いもあるだろうが、サッチマンはエスノメソドロジスト (ethnomethodologist) であり¹⁴⁾、エスノメソドロジー (ethnomethodology) が世界内存在の理論と親和的なので、ドレイファスによる論文審査を希望したのかもしれない。

ハイデガーの主著『存在と時間』においては、直接的にユクスキュルへの言及は認められない。しかし、それでもユクスキュルらの生物学研究が哲学的思考によることを指摘している。一方、『形而上学の根本概念』では、紙幅をとってユクスキュルの環世界の理論について、後に紹介するように、批判的に論じている。つまり、ハイデガーはユクスキュルの影響をいくらかは受けたのであり、ユクスキュルとハイデガーから、ドレイファス、サッチマンを介して、レイヴとウェンガーに到る理論的系譜が考えられる。なお、ユクスキュルの著書を翻訳し、紹介した前野佳彦は、ユクスキュルがカント主義者であったことをその自伝や当時の文献から明らかにしている¹⁵⁾。したがって、ユクスキュルからさらに遡るならば、認識のコペルニクス的転回をしたとも言われるカントの影響をみる

ことになる。

3 行為者と活動と世界との相互構成

(1) 環世界の構成

ユクスキュルは、動物と環境について、次のように述べている。すなわち、「内的世界と環境の上位事象として、そのすべてを支配するのは体制である (Über der Innerwelt und Umwelt steht der Bauplan alles beherrschend)」¹⁶⁾と言う。ここで言う体制とは、動物と環境との一体的なシステムである。すなわち、動物は環境のなかに生き、自らの環境をつくっている。それが環世界であり、それぞれの動物によって異なる、主観的な世界である。わたしたち人間も含めて、動物は主観的な環世界の外部に出ることはできず、主観に左右されない客観的実在としての環境を知ることはできない。知ることができない、主観の外部はもはや問題にはならない。

なぜなら、「主体が知覚するものはすべてその知覚世界 (Merkwelt) になり、作用するものはすべてその作用世界 (Wirkwelt) になるからである。知覚世界と作用世界が連れだって環世界 (Umwelt) という一つの完結した全体を作りあげている」¹⁷⁾からである。人間も例外ではなく、主体の内部の知覚器官は、環境から知覚標識 (Merkmal) を知覚し、知覚情報を獲得する。それは、主体の内部で作用器官に伝えられ、作用器官が環境に作用し、環境に作用標識 (Wirkmal) と呼ぶ痕跡を与える。このような主体の行為としての、それぞれに知覚と作用の可能な範囲が、その主体に固有の環世界なのである。

さて、花畑を目にして、わたしたちは美しいと思う。色とりどりに咲き誇る花々が目に飛び込んでくるからである。そこには、ミツバチも花から花へと飛び移り、花の蜜を集めているようである。すると、ミツバチも、わたしたちと同じように美しい花を見ているのだろうか。ミツバチの環世界を想像してみよう。

ミツバチの場合は、「知覚器官の局所記号に対応する知覚細胞が二つのグループに分けられてい

て、一方は『開いた』パターンに対応し、他方は『閉じた』パターンに対応すると考えればいいのである。それ以上の区別はない¹⁸⁾と、ユクスキュルは言う。ここに明らかなように、ミツバチは花弁を人間のように仔細に知覚できない。花の知覚は二つのみである。すなわち、咲いた花は開いたパターンである星形や十字型として知覚され、花から蜜を吸う作用ができるので、それらには意味がある。それに反して、蕾は閉じたパターンの円として知覚され、蜜を吸う作用の対象とはならない。このように、ミツバチの場合は蜜を吸うという活動に応じて、知覚と作用の働きによって環世界が構成されている。すなわち、ミツバチと人間とでは、同じ花畑を前にしても、それぞれに異なる世界を経験しているのである。

また、知覚と作用の機能は空間としてだけでなく、時間としても環世界を構成することを忘れてはならない。ユクスキュルは、次のように述べている。すなわち、「位置が視覚空間にとっての自然な尺度であるように、瞬間は時間にとっての自然な尺度です。瞬間が短くなればなるほど、そのつど主体にとっての環世界の事物の運動はますます緩慢になります（主観的時間量）。人間の場合、それはおよそ1/16秒¹⁹⁾」なのである。一方、カタツムリの場合は瞬間が3/4秒となる。そのため、カタツムリの環世界においては、カタツムリ自身は決して遅くはなく、歩く人間はかなり早いのである。このように、時間も知覚と作用とによって動物それぞれに異なるのである。物理的な対象だけでなく、時間的にも異なる環世界が構成されることになる。

(2) 共進化による相互構成

前項までに述べてきたように、ユクスキュルによれば、知覚と作用によって、それぞれに個性的で主観的な環世界が構成されると言える。さらに、フランシスコ・バレラ (Francisco J. Varela) らが論じる、カップリングの歴史である共進化 (coevolution) についても触れておこう。先の例と同様に、ミツバチと花の場合である。両者の関

係において「花は蜜によって受粉媒介者を引きつけるが、そのために花は他種の花とは異なり、より目立つようにしなければならない。その一方で、ミツバチは花から蜜を収集するが、そのために遠くからでも花を認識しなければならない。両者の広い範囲での双方向性の拘束が、植物の特徴とミツバチの感覚能力との共進化としての、カップリングの歴史を形づくった²⁰⁾」のである。ミツバチは紫外線を知覚して花を探し出し、花は紫外線を反射してミツバチを呼び寄せる。両者はカップリングの関係によって、互いを進化させてきたのである。

ここでは、動物と植物とがそれぞれが主体として互いに影響を与えるとともに、同時に客体としても影響を与えられている。このように主体と客体という二分法を無力化、あるいは脱構築するようなシステム的な見方が述べられている。

ユクスキュルが論じるように、動物も人間も行為者として、知覚器官によって知覚世界から刺激を得て、得られたそれに応じて作用世界へと働きかける。ここには、知覚世界－知覚標識－主体の知覚と作用－作用世界－作用標識というサーキットをみることができ。そのようなサーキットを、ユクスキュルは機能環 (Funktionskreis) と呼ぶ。それによって、「動物主体は最も単純なものも最も複雑なものもすべて、それぞれの環世界に同じようにはめ込まれている。単純な動物には単純な環世界が、複雑な動物にはそれに見合った豊かな構造の環世界が対応している²¹⁾」と言う。

このような機能環が情報のサーキットとして機能することによって、環世界と行為者が同時につくられるのである。なぜなら、情報のサーキットとして機能環が機能するには、行為者による知覚と作用という行為が欠かせないからである。知覚と作用は、知覚世界と作用世界を重ね合わせる環世界をつくる。こうして、環世界が行為者をつくと同時に、行為者が環世界をつくるという相互構成が認められよう。また、それには、バレラらが論じるカップリングの歴史としての共進化のプロセスをも認めることができよう。それは、ある

行為者が自身にとって環境の一部となる別の行為者と密接に互いを強く拘束して、互いの機能環を変化させることである。

バレラらの議論も同様だが、ユクスキュルの環世界論は、実在としての客観的な全体世界を否定する、主観主義的で多元的な世界観だと言えよう。この点については、ユクスキュルはプラトンのアイデアについて論じることによって明らかにしようとしている。すなわち、「プラトンのアイデアは、おそらくあれこれの形態で反映される何らかの原像と比較されるようなものではなく、全体をつらぬく、すなわち知覚する主体と知覚される客体をつらぬく運動法則だ、という考え方です。主体と客体がつねに相互に対応しながら、さまざまな生の場面を経過してゆくあり方を凝視するとしたら、この場面のもつ法則こそプラトンがアイデアと呼んだものに近いのではないか」²²⁾と言う。

ここでは、知覚する主体と知覚される環世界との対応関係が一定であることにアイデアを見出しているようである。明らかに、主体の知覚を超えるような超越的な世界を否定している。しかし、知覚が生み出す環世界は主観的だからといって、自由に構成できるのでもない。知覚と作用の機能が生得的に定まっているので、当該の動物には、環世界はそれ以外にはあり得ないと思える、客観的な世界として立ち現れるのである。

4 学習としての環世界の構成

(1) 盲導犬の学習

レイヴとウェンガーは、学習は全人格を取り込んだ社会的実践であり、社会的な実践の共同体への参加としてのアイデンティティの構成であると言う。そこでは、参加する実践の共同体において「十全的な参加者になること、メンバーになること、ある種の人間になることを意味している」²³⁾のである。このように、学習は共同体への参加であり、参加によって共同体のメンバーになるのである。また、有能な参加者が増えるなら、共同体は維持され、発展する。学習は、共同体の維持と発展への貢献でもある。

このような参加は、参加する共同体から認められるように正統的でなければならず、同時に周辺(periphery)から十全(full)へと参加の度合いを拡大していかなければならない。こうして、「正統的周辺参加によれば、知的なアイデンティティの形成と実践共同体の形成との関係を重視して強調することになり、多様な実践の共同体の構造的な性質の具体化として、持続する学習について考えることが可能になる」²⁴⁾のである。

ここにも明らかなように、脱中心化によって、学習者と共同体との一体的な関係のなかに、学習を位置づけようとしている。知識や技能の個人的な習得などは、問題にしない。なぜなら、それらがあったとしても、無視し得るほどに小さな、学習の一部にしかすぎないとみるからである。

このような学習について、ユクスキュルの環世界の視点から考察しよう。前項では、行為者と世界と行為とが、ユクスキュルの言う機能環によって、相互構成されることをみてきた。では、生得的な行為を超える、社会文化的な発達としての学習は、どのようなものであるのか。

そこで、ユクスキュルが盲導犬の学習について詳細に論じていることに注目したい。視覚障害者は、視覚を失っているので、行動が制約される。その制約を縮減するように、盲導犬が視覚障害者を導く。たとえば、横断歩道は人間には意味があるものとして知覚標識になり、人間の環世界を構成する。一方、犬にとっての横断歩道は無意味であり、知覚標識とはなり得ない。すなわち、横断歩道の白線は見えないのも同然であり、知覚されることはない。したがって、それは犬の環世界を構成しないのである。しかし、視覚障害者を案内する盲導犬は、横断歩道を知覚して安全を確かめ、その白線からはみ出すことなく、視覚障害者とともに道路を横断できなければならない。

このような盲導犬を育成する「調教の難しさは、イヌの利益になる知覚標識ではなくて盲人の利益になる知覚標識を、イヌの環世界に組み込まねばならないところにある」²⁵⁾と、ユクスキュルは言う。すなわち、一般的な犬にはできない盲導犬

の行為は、人間の環世界を構成する知覚標識を生得的な犬一般の環世界に組み込むことによって、はじめて可能になる。それは、新たな環世界の構成である。同時に、そうすることによって、一般的な犬は、特殊な盲導犬になるのである。犬であっても、盲導犬として振る舞う行為者がつくられるからである。こうして、学習は、盲導犬に限らず一般的に、新たな環世界と自己の相互構成の活動と言えよう。

(2) 実践の共同体への参加

盲導犬は、その血統や性格が重視される。すなわち、人とふれ合い、ともに生活することを喜ぶものの、性格がおとなしい子犬が盲導犬の候補として選ばれるのである。訓練は、人間への服従に関することから始められる。その後、視覚障害者を誘導する訓練が行われる。たとえば、「使用者(訓練士)に『角(コーナー)があるよ』と教えて曲がる〈角探し〉」²⁶⁾である。また、盲導犬を使用する視覚障害者の学習も必要である。つまり、「1年以上の時間をかけて育成された盲導犬でも、いきなり初対面の使用者の目となって自由自在に歩けるわけではない。使用者も盲導犬と歩く練習が必要で、そのためにおこなわれるのが共同訓練」²⁷⁾なのである。

血統を考慮して子犬を誕生させるのは、ブリーダーである。盲導犬の候補となる子犬とともに生活して人間に慣れるように育てるのが、パピーウォーカーである。十分に人に慣れた候補犬を盲導犬にするための訓練を行うのが、訓練士である。盲導犬の使用者となるのが、視覚障害者である。さらに、「長年盲導犬として働いてきたリタイア犬を、天寿を全うするまでボランティアの家庭で看取ってもらうシステム」²⁸⁾も、盲導犬の育成を財政的に支えるスポンサーも必要である。ここには、盲導犬の育成という目的を共有する多くの人々によって、実践の共同体が形成されている。

子犬は、盲導犬育成のための実践の共同体に参加することによって、盲導犬になるための学習が可能になる。犬であっても、その参加が学習であ

る。参加によって、盲導犬育成の実践共同体のメンバーである盲導犬になっていくのである。したがって、脱中心化の見方からすれば、盲導犬の学習は、盲導犬育成の実践共同体に参加する子犬がしだいに一人前の盲導犬になっていくことである、と言えよう。

これまで述べてきた盲導犬の場合のように、生得的な環世界を超えて、新たな環世界を構成することが学習であると言えよう。ただし、第1の学習は、生得的な環世界へのよりよい適応、あるいは生得的な知覚と作用によって生得的な環世界を強化する行為であると考えられる。しかし、第2の学習は、生得的に構成する環世界を超えて、新たな環世界の構成を行うことである。それは、生得的な環世界をつくる共同体から別の共同体への参加としての、越境とも言えよう。越境といっても、複数の環世界を結びつけたり、複数のそれらを一つにまとめ上げるように新たな環世界を構成するように考えられる。

5 文化的実践共同体への参加としての学習

(1) 魔術的環世界の構成

ユクスキュルの環世界論に言及するハイデガーは、存在一般についての考察のために、動物の環世界に注目して世界について論じている。すなわち、「われわれは、動物は世界貧乏的である、というテーゼを、石は無世界的である、人間は世界形成的である、という他の二つのテーゼの間に置く。世界貧乏的—貧乏は豊富に対して区別される。貧乏—他に対する少。動物は世界貧乏的である。動物はより少なく持つ。何を、か?動物にとって接近通路可能なもの、動物が動物として付き合うことができる相手、動物が動物として襲われるかもしれない、その襲ってくるもの、動物が生きているものとしてそれとの関係のなかに立っているその相手」²⁹⁾が少ないということである。

また、世界については、ハイデガーは次のように言う。世界とは「接近通路可能であり、有るものの有の様式にとってはそれとの付き合いが必然的であるような、そのようなものである。石は世

界なしにある。石が例えば路上に横たわっている。われわれは、石が地面に圧力を加える、と言う。その際石は地に『接触』している。しかしここでわれわれが『接触』と呼んでいることは、さわる、ということではない。この接触はトカゲが石の上に横たわって日向ぼっこをするときトカゲが石に対してもっているあの関係ではない。ましてや、石と地面とのこの接触は、われわれが自分の手を或る人の頭の上に置くととき経験するあの感触ではない³⁰⁾のである。

ハイデガーの「接近通路可能」という言葉は、ハイデガーらしく独特であるが、環境のなかのあれこれのものに接近し、それらを知覚と作用の対象とすること、及び環境内を移動することを意味するのではないか。そうであれば、ハイデガーの言う世界はユクスキュルの環世界と読み替えても大きく誤ることはないだろう。

すると、ハイデガーの第1のテーゼは、石のような無生物は知覚と作用の機能を持たないので、環世界を形成することはない、と解釈できる。また、動物は知覚と作用の機能をもつので、環世界を形成するが、形成される環世界は人間に比べて貧しいということであろう。すなわち、動物は生得的に形成される環世界に閉じ込められる傾向が強い。一方、人間はある程度は自由に環世界を形成すること、あるいは生得的に形成される環世界を超えて、新たなそれをつくるのが可能だと、と考えているようである。それが、「人間は世界形成的である」という第3のテーゼが意味することであろう。

このようなハイデガーの議論と同様のことは、ユクスキュルが魔術的 (magische) 環世界として論じている。フロベニウスの著書からの引用と記しているが、「その少女は一個のマッチ箱と3本のマッチで、お菓子の家やヘンゼルとグレーテルと悪い魔女のお話をしながら一人で静かに遊んでいたが、突然こう叫んだ。『魔女なんかどこかへ連れていっちゃって！こんなこわい顔もう見ていられない』³¹⁾と。すぐに、マッチ棒を投げ捨てたのかもしれない。この例のように、限

られた主体にしか知覚できない環世界を魔術的環世界と呼ぶのである。

このような魔術的環世界を構成する少女はグリム童話の物語「ヘンゼルとグレーテル」をすでに読んでいた。その物語によって環世界を構成し、遊ぶのである。物語がつくられることも、物語を読むことも、マッチ棒とマッチ箱がつくられることも、それらをつかって遊ぶことも、いずれも文化的な実践である。このような文化的な実践のなかで、一本のマッチ棒が知覚標識として魔女を出現させて、恐怖を感じさせたのである。

もちろん、親が子どもを捨てる物語である「ヘンゼルとグレーテル」はメルヘンである。しかし、それには「ヨーロッパ、特にドイツでは天候不順や戦争のため歴史上何度も飢饉があり、その記憶は民衆の心のなかに忘れがたく深く刻み込まれていた³²⁾」ことがある。したがって、民衆共同体の記憶を引き継ぐ歴史-文化的な実践として、少女の魔術的環世界は構成されていると言えよう。その構成は、歴史的に継承されている文化的実践の共同体に参加するように、少女が遊ぶことによって可能となっているのである。

(2) 科学的な環世界の構成

ユクスキュルは、天文学者の環世界をも論じている。では、科学によって構成される世界は、どうであろうか。それをも、主観的というのであろうか。天文学者の環世界について、次のように述べている。すなわち、「地球からできるだけ遠く離れた高い塔の上に、巨大な光学的補助具によってその目を宇宙の最も遠い星まで見通せるように変えてしまった一人の人間が座っている。彼の環世界では太陽と惑星が荘重な足どりでまわっている。その環世界空間を通りぬけるには、足の速い光でさえ何百万年もかかる³³⁾」という世界である。したがって、仰ぎ見る星空は、天文学者と一般の人々とは異なっているのである。

天文学者は、科学的に客観的で普遍的な世界を描き、宇宙について論じる。それは、観測データの作成と理論の構築などとして行われる。しかし、

そうして明らかにされた世界も、やはり一つの環世界なのである。最新の機器の使用によって、知覚と作用の機能は飛躍的に拡張するが、それらを操作して得られたデータを解釈するのは、主観的な機能環に埋め込まれた天文学者なのである。また、彼は客観的で普遍的だと考える世界について語るが、それは天文学研究という特殊な文脈のなかにおけることでしかないこともある。

ユクスキュルの書を翻訳し、紹介した日高敏隆もユクスキュルがカント的であることを指摘している。すなわち、「カントによれば、われわれが認めたものが存在することになる。しかし、それでは科学はできない。だから科学はカント的であってはならないのであって、唯物論的でなければならない。それがその当時の一般的な流れであった。／その中でユクスキュルは、主体が認めたものによって構築された世界にこそ意味があると言ったのである。これはまったく唯物論的ではなく、きわめてカント的である」³⁴⁾と言う。

このことについては、レイヴとウェンガーによれば「一般化された表現であっても、特殊な状況でしか通用しない。それ以上に、抽象化の原理はそれ自体が特殊なものとして特殊な状況におけること」³⁵⁾なのである。科学的知識が一般化や普遍性を標榜しようとも、それ自体が科学研究という文脈におけることである。したがって、それは科学研究の文脈を超えて、一般化や普遍化の求めに応えることはできない。そのため、科学的な知識や理論も特殊な世界を描いている。それは、ユクスキュルによれば、科学者の環世界なのである。

前項で紹介した「ヘンゼルとグレーテル」の物語を読んで遊ぶ少女は、物語を継承する文化的実践の共同体に参加していたと言えよう。天文学研究をする研究者は天文学研究を維持し、発展させる学問の共同体に参加しているのである。いずれも、社会的で文化的な実践共同体への参加としては等しい。さらには、環世界を構成することにおいては、遊びも科学研究も文化的な活動として、明確に区別する必要もないだろう。実際的に、その必要があれば、必要に応じて区別すればいいの

である。

これらのような新たな環世界の構成は、構成されるそれを共有する共同体への参加としての学習である。また、生得的な環世界を超える新たなその構成は、文化的実践としての活動が可能にする。すると、文化的実践への参加こそが、生得的な環世界を超える新たな環世界の構成としての学習となるのである。

6 小括

ユクスキュルの環世界論を足場として、正統的周辺参加論について論じたことは三つある。第1は、行為者と活動、及び世界とが相互構成の関係にあることについてである。ここでは、動物は知覚と作用によって環境に働きかけ、主観的な環世界を形成していることをみてきた。機能環に組み込まれることによって、動物と世界とが相互構成され、動物はそれぞれに主観的で個性的な環世界を構成し、活動ができる。このような環世界の理論を足場として、正統的周辺参加論が論じる学習者と学習活動、及び世界との相互構成について明らかにしたのである。

第2は、学習によってアイデンティティが形成されること、何者かになることについてである。学習とは、生得的な環世界の構成とは異なる新たな環世界の構成、あるいは生得的な環世界とは別のそれとの接続であることを論じた。そうすることによって、何者かになっていくのである。ユクスキュルが事例として紹介する、盲導犬の学習が一つの典型である。一般的な犬の環世界に人間の環世界が接続され、盲導犬の環世界が構成されるようになる。それは、一般的な子犬が一人前の盲導犬になる学習なのである。

第3は、学習は文化的な実践共同体への参加となることについてである。ユクスキュルは、魔術的環世界の構成を論じている。それは、ハイデガーが言う世界制作的な活動であろう。それによれば、童話を読んだ少女の遊びにしても、天文学者の研究活動にしても、いずれにおいてもまわりの事物が新たな知覚標識となって知覚され、新たな環世

界が構成される。このような環世界の構成は、生得的な知覚と作用を超える新たなそれらを可能にする、文化的実践が欠かせない。また、共同体による文化的実践が重ねられることによって、人々が共有する環世界は受け継がれ、ときには拡大される。そのため、文化的実践を行う者は、共同体の維持と発展に貢献することになる。

最後に、学校も文化的実践の共同体であることについて考察しよう。学習者と教師、さらには保護者や地域住民、教育行政などの専門家が参加して、知的で道徳的、身体的な教育と学習の実践を行う共同体が形成されている。知も道徳も身体の動きも文化なので、学校は文化的実践の共同体なのである。そこへの参加は、生得的ではない知覚と作用による新たな環世界を形成する。そこで、問いたいのは、学校の文化的実践によって、学習者が形成する環世界はどのようなか、である。個人的な知識と技能の習得を学習とする内化の見方が導く学校学習が構成する環世界は、豊かなのか。それによれば、学校共同体の一員としてのアイデンティティの形成と学校共同体の維持と発展にとどまっている、と言え過ぎるだろうか。

この点について、レイヴは次のように述べている。学校数学の場合を例にしているが、「学校は、庶民が行為するためのイデオロギーを意味している。つまり、学校数学は他の日常生活で起こる活動は違う種類のものであって、『本当』の数学にこそ大きな価値があり、『使われるべきもの』と信じられ、合理的な見解をたてるための中心的役割を果たしている。それに対して『本当の数学』のアルゴリズム形態は、学校という場面で論証的に伝達されているのだが、実践で具体化されるにはずっと力がない」³⁶⁾と言う。すなわち、学校での学習は学校的なイデオロギー（一般性や合理性こそが重要で価値があること）を強化するが、学校を卒業しての日常生活においてはその学習成果は無力なのである。

このような過激な断罪とも思える、レイヴの学校論に全面的に同意することは難しいかもしれない。それでも、佐伯胖が論じるように「学びの実

践共同体は、社会や文化の中にあり、学校や教室はそこへ子どもがアクセスしていく『橋渡し』の場と見なすべき³⁷⁾であろう。そうすることによって、学校が埋め込まれている現実社会の実践共同体に参加するように学ぶことが始まるのである。その学びは、学校的な環世界の構成にとどまることがないはずである。そこには、学校共同体を超えて、市民社会への参加による環世界の構成を可能にする、真正のカリキュラム³⁸⁾の実践が期待できるのではない。

注及び引用・参考文献

- 1) ユクスキュル/クリサート、2005、『生物から見た世界』（訳・日高敏隆他）岩波書店として翻訳されたのは、次の著書である。そこでは、動物から人間へと環世界論を拡張している。そのため、状況学習論に類似の理論だと思える。
Jakob von Uexküll/Georg Krisat, 1934, *Streifzüge durch die Umwelten von Tieren und Menschen: Ein Bilderbuch unsichtbarer Welten.*
- 2) Jean Lave & Etienne Wenger, 1991, *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge University Press (ジーン・レイヴ/エティエンヌ・ウェンガー、1993、『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』（訳・佐伯胖）産業図書）。
- 3) Jean Lave & Etienne Wenger, 2006, *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge University Press, p.33.
- 4) Yrjö Engeström, 2015, *Learning by Expanding: An Activity-theoretical to developmental research*, Cambridge University Press, p.138.
- 5) Lave & Wenger, 2006, p.49.
- 6) ヴィゴツキー、2003 (1935)、『「発達」の最近接領域』の理論—教授・学習過程における子どもの発達』（訳・土井捷三/神谷英司）三学出版、pp.63-64.
- 7) 次の著書において、精神疾患、学習、遊びとファンタジーなどに関して、ダブル・バインドを多様に論じている。
Gregory Bateson, 1972, *Steps to an Ecology of Mind*, Ballantine Book (グレゴリー・ベイトソン、1990、『精神の生態学』（訳・佐藤良明）思索社、1990年）。
Gregory Bateson, 1979, *Mind and Nature: A Necessary Unity*, Wildwood House (グレゴリー・ベイトソン、1982、『精神と自然—生きた世界の認識論』（訳・佐藤良明）思索社）。
- 8) Lave & Wenger, 2006, p.50.

- 9) ピエール・ブルデュー、2012、『実践感覚1』（訳・今村仁司／港道隆）みすず書房、p.2。
- 10) ブルデュー、2012、pp.83-84。
- 11) 福島真人、1993、「認知という実践—『状況的学習』への正統的で周辺的なコメント—」ジーン・レイヴ／エティエンヌ・ウェンガー『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』（訳・佐伯胖）産業図書、p.149。
- 12) 佐伯胖、1999、「監訳者あとがき」ルーシー・A・サッチマン『プランと状況的行為—人間—機械コミュニケーションの可能性』（監訳者・佐伯胖）産業図書、p.209。
- 13) Hubert L. Dreyfus, 1991, *Being-in-the-World : A Commentary on Heidegger's Being and Time*, The MIT Press (ヒューバート・L・ドレイファス、2000、『世界内存在—『存在と時間』における日常性の解釈学』（監訳・門脇俊介）産業図書）。
- 14) 状況行為論を論じること、及びコピー機を利用する人々の会話の分析においては、明らかにエスノメソドロジストである（サッチマン、1999を参照のこと）。
- 15) 次を参照してほしい。
前野佳彦、2012、「解説『カント二世』の生物環境論」ヤーコプ・フォン・ユクスキュル『動物の環境と内的世界』（訳・前野佳彦）みすず書房。
- 16) ヤーコプ・フォン・ユクスキュル、2012a、『動物の環境と内的世界』（訳・前野佳彦）みすず書房、p.14。
- 17) ユクスキュル／クリサート、2005、p.7。
- 18) ユクスキュル／クリサート、2005、p.77。
- 19) ヤーコプ・フォン・ユクスキュル、2012b、『生命の劇場』（訳・入江重吉他）講談社p.179。
- 20) Francisco J.Varela, Evan Thompson, Eleanor Rosch, 1993, *The Embodied Mind : Cognitive Science and Human Experience*, MIT Press, p.202.
- 21) ユクスキュル／クリサート、2005、p.20。
- 22) ユクスキュル、2012b、p.279。
- 23) Lave & Wenger, 2006, p.53.
- 24) Lave & Wenger, 2006, p.55.
- 25) ユクスキュル／クリサート、2005、pp.101-103。
- 26) 石黒謙吾／秋元良平、2015、『盲導犬クイールの一生』文藝春秋、p.101。
- 27) 石黒／秋元、2015、p.122。
- 28) 桑原崇寿、1999、『盲導犬チャンピオン—日本で最初にヒトの眼になった犬—』新潮社、p.165。
- 29) マルティン・ハイデガー、1998、『形而上学の根本概念—世界—有限性—孤独—（ハイデガー全集第29/30巻）』（訳・川原栄峰他）創文社、p.314。
- 30) ハイデガー、1998、p.319。
- 31) ユクスキュル／クリサート、2005、p.134。
- 32) 高橋義人、2006、『グリム童話の世界—ヨーロッパ文化の深層へ—』岩波書店、pp.15-16。
- 33) ユクスキュル／クリサート、2005、p.155。
- 34) 日高敏隆、2007、『動物と人間の世界認識—イリュージョンなしに世界は見えない—』筑摩書房、p.46。
- 35) Lave & Wenger, 2006, pp.33-34.
- 36) ジーン・レイヴ（訳・無藤隆他）、2007、『日常生活の認知行動—ひとは日常生活でどう計算し、実践するか—』新曜社、p.278。
- 37) 佐伯胖、1998、「訳者あとがき」ジーン・レイヴ／エティエンヌ・ウェンガー『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書、pp.187-188。
- 38) たとえば、以下において論じている。
佐長健司、2012、「社会科授業における問いの状況論的検討—正統的周辺参加としての学びを求めて—」日本社会科教育学会『社会科教育研究』第115号、pp.79-89。
佐長健司、2015、「市民の変容のダブル・バインド—正統的周辺参加におけるコンテクストの学習—」佐賀大学文化教育学部『研究論文集』pp.63-74。
佐長健司、2016、「社会変革へ向かう学習を求めて—正統的周辺参加における拡張による学習—」佐賀大学教育学部『研究論文集』第1集第1号、pp.117-131。
佐長健司、2017、「学校カリキュラムと教師の自己変容のシステム論的検討」佐賀大学教育学部『研究論文集』第1集第2号、pp.71-82。
佐長健司、2019、『社会科教育の脱中心化—越境的アプローチによる学校教育研究—』大学図書出版。